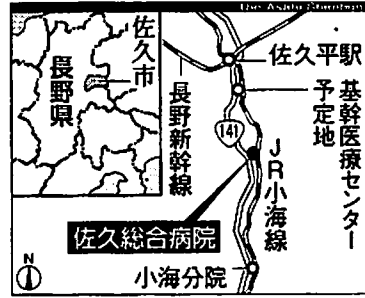


病院拠点に町づくり

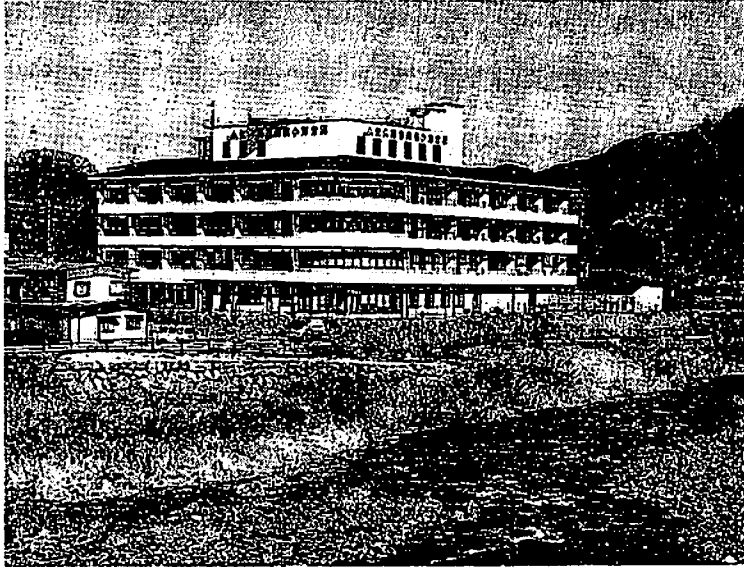
不況で地域経済が傷むなか、医療や福祉分野の経済波及効果が注目されている。長野県では、地域ネットワークを築いてきた佐久総合病院を軸とした「町づくり」が動き出している。

(佐藤章)



長野県東部、千曲川に沿って走るJR小海線の小海駅。改札口を抜けてすぐ左側の駅舎に「診療所」の入り口。明るい待合室で、お年寄りたちが診察の順番を待っていた。

J A長野厚生連が運営する佐久総合病院の小海診療所。開設された00年当時、駅舎内の有床診療所は珍しかった。



千曲川沿いに立つ佐久総合病院の小海分院＝長野県南佐久郡小海町

長野・佐久総合病院 駅に診療所、にぎわう商店



「医者に診てもらい、食事して買い物して電車で帰る人がたくさんいた」。診療所に隣接するレストラン店長の津次男さんは言う。駅前の商店街では改装する店舗が相次いだ。「診療所がなくなったから、駅前がさびれてしまう」

周辺町村には、この駅舎内をはじめ診療所が六つある。中心となるのが、佐久総合病院小海分院だ。分院から6診療所に医師が派遣され、24時間救急往診体制を敷く。小海分院を核とした「医療ネットワーク」

J A長野厚生連専務理事 盛岡正博さん



ネットワークが地域に及ぼすのは、いつでも医療サービスが受けられるという「安心」だけではない。街のにぎわいを取り戻し、雇用を増やすという経済効果もある。

佐久総合病院の職員数は医師を含め約1800人。本院小海分院、老人保健施設などを合わせ約12000のベッド数を抱えるが、本院が手狭になり、「地域医療センター」(3000床を残し、佐久市中心部に高度医療を担う「基幹医療センター」(4500床を

ネットワーキングが地域に及ぼすのは、いつでも医療サービスが受けられるという「安心」だけではない。街のにぎわいを取り戻し、雇用を増やすという経済効果もある。

佐久総合病院の職員数は医師を含め約1800人。本院小海分院、老人保健施設などを合わせ約12000のベッド数を抱えるが、本院が手狭になり、「地域医療センター」(3000床を残し、佐久市中心部に高度医療を担う「基幹医療センター」(4500床を

「赤ひげ」、医師集まる

だが、すべての病院が地域の「核」になれるわけではない。厚労省によると、90年には約8900に減った。主な原因は医師不足だが、佐久総合病院は人材に恵まれてきた。

同病院勤務が19年目となる由井和也・小海分院診療部長は「私は医療に恵まれない地域で頑張ってきた。この病院には、そういう医師が多い」と語る。09年度の初期研修医を15人募集したところ、37人の応募があった。定員割れを起こす病院も多いなか、高い人気を保っている。

佐久総合病院は、「農民とともに」を掲げた故若月俊一元院長の徹底した地域密着

「赤ひげ」のイメージが医師の卵たちをひきつけてきた。

盛岡氏は「志のある医師が集まると患者が集まる」と言う。佐久市だけでなく、県外からも患者が来る。新たな「基幹医療センター」が必要になったのはこのためだ。

もちろんイメージだけではうまくいかない。盛岡氏は「殉教者のような生活で、よい医療を提供する方が大事だ。それを可能にするのはしっかりした経営だ」と言う。

盛岡氏は、医療法人徳洲会で病院建設に携わり、経営手腕で知られた。医事評論家の

川上武氏によると、徳田虎雄理事長に次ぐ「実質的なナンバー2」。病院の経済効果に気が付いたのは82年、埼玉県羽生市で徳洲会グループの病院院長をしている時だった。

若者が首都圏から地元に戻り、病院に勤めるようになって。病院の周辺には商店が増えた。「病院を建てると、地域経済に力を呼び戻すことができる」と気がついた。

95年、若月氏に招かれた後、早期から経営勉強会を開き、全職員の年度末手当の一部を積み立てた。土地取得や新築費用に困らなかつたのはそのためだ。「いい医療を提供する病院は暮らしを支え、地域経済の核になりうる。そういう意識を、医師も職員も共有しなければならぬ」と盛岡氏は話している。

天然ガスの生産・消費量と世界一のロシアで、三... しかして、液化LPGや専... のならきうしたリスクはな... 一財す。

停办改事

知和知和

三本 与

知事 不

2000. 0

1 1

2 2

3 3

4 4

5 5

6 6

7 7

8 58

9